



交配



系統養成



耐冷性検定ほ場



水稻採種ほ場審査

品種育成から種子生産まで～宮城の稲作を支える大崎耕土～

大崎耕土は、「品種育成」や「種子生産」といった面からも、宮城の米づくりに重要な役割を果たしています。

宮城県古川農業試験場（大崎市）では、昭和2年に水稻育種を始めてから、平成29年までに47品種を育成しています。時代の多様なニーズに合わせた品種育成をしており、「ササニシキ」、「ひとめぼれ」を始め、「まなむすめ」、「東北194号（ささ結・ささゆた香）」や「ゆきむすび」、酒米の「蔵の華」など、数多くの品種が育成されました。

育種は、母親となるイネのめしべに、父親となるイネの花粉をかける「交配」から始まります。そこから約10年かけ、耐冷性や耐病性、高温耐性などの検定や食味試験を行い、目的とする性質を持った個体を選ぶ「選抜」とその性質を安定させる「固定」を繰り返します。その後「奨励品種決定調査」を経て、品種登録されます。最近では「金のいぶき」や「だて正夢」が新たに奨励品種となり、平成30年に本格デビューしました。

また、大崎耕土では水稻の種子生産が行われており、県内で必要な水稻種子の約6割、10品種が大崎市・加美町で生産されています。採種農家がきめ細やかな栽培管理や調製作業を行い、県による2回のほ場審査と生産物審査を合格した優良種子が稲作農家のもとに届けられています。稲の他にも麦類や大豆の種子生産も行われており、県内で必要な種子のうち、麦類は約3割、大豆は約2割が大崎地域で生産されています。

（参考資料：宮城県）